

導入（家で）

銀行の支店長：率直に申し上げますと、貴方の給料と奥様は働いていないということから、私としては貸付を許可することは完全に不可能かと思えます。

若い男： ああ、少なくとも...絶望的だ、うんざりする！もう我慢ができない。気が狂っているせいだ。毎日同じだ！狂っている、いつも同じだ。この狂ったせいで、今日はつきあってられない、ええ。

銀行の支店長：どうか、落ち着いて聞いてください。私はこの銀行で20年以上支店長を勤めています...

若い男： もうだまって、パパ！ここは銀行ではない。もう前に銀行の仕事は辞めたのだ。私は全く貸付は希望していない、望むのはスープを飲んで欲しいのだ。

銀行の支店長：しかし、何だって...

息子： ねえ、時間だ、もう私達は出かけられない、ええ、駄目、駄目、フリアンに電話をしよう、そして私達を待たないでと言おう。入場券は誰かにあげよう、もう私達は間にあわない。

妻： フォン、ねえ、貴方、ここに持っていないのよ、切符売り場に頼んであるのは確かね。

フォン： 夕食は終わっていない、最後にも間に合わないかも知れない。

妻： ねえ、フォン、だめ。

フォン： いつも悪いのだ。日に日に頭が悪くなる。

父： 君達、出掛なさい、もう食事は終わりだ。

老人ホーム最初の日

エミリオ： やあ、こんにちわ。

男1： やあ、こんにちわ。

エミリオ： 機嫌如何ですか、私、エミリオと言います。

老人： 機嫌如何ですか、私、エミリオと言います。機嫌如何ですか、私、エミリオと言います。

息子： いいね、パパ、もう新しい友達が出来たの、ええ。パパのような老人が多くいて、ここはすごく良いね！

貴方に必要なものは全てあって、家より良いかも知れない。

ヌエラ： ねえ、私達は、もう、そろそろ行かなくては。

息子： 時々会いにくるよ。気をつけてね。パパ。

エミリオ： さようなら、息子。

老人： さようなら、息子、さようなら、息子、さようなら、息子。

看護師： ねえ、ラモン、もう私達分かったよ。

ラモン： もう私達分かったよ。

貴方はエミリオですか？一緒に来てください。貴方の部屋に案内しますよ。

エミリオ： ああ、はい、有難う。

看護師： スーツケースを持ちましょう。

エミリオ： いいえ、ご迷惑は掛けられません。自分で持ちます。

看護師： 迷惑などではありませんよ。私についてきて下さい。こちらですよ。
ラモン： こちらですよ、こちらですよ、こちらですよ、こちらですよ。

子供： 帰りたいよ、ママ。

看護師： どうぞ、どうぞ、お入り下さい、私はミゲルを捜してきます。貴方の同室の仲間です。お互いに知り合いになってください。

エミリオ： ああ、良いですね。有難うございます。ここで待っております。

ミゲル： 今日は、お仲間。この独房をどう思いますか？ 君は何年の刑期ですか。

エミリオ： 何年の刑期？

ミゲル： いや、いや冗談ですよ。私はミゲルです、君の同室の仲間です。

エミリオ： 私はエミリオです。お知り合いになって嬉しいです。君はアルゼンチンの方、そうでしょう。

ミゲル： ええ、そうです、生まれはリバデロです。しかし両親は私が一歳になった頃移住したのです。

エミリオ： ああそうですか、貴方は母国に戻ったということですね。

ミゲル： ええ、ここには良い老人ホームが沢山あってね。

いいや、実はこちらに住んで30年になります。まだ、なまりが無くならなくてね。ええと、私の人生はあとでお話することにしましょう。

この老人ホームを案内してみましようか。

少し休憩をしたくありませんか、スーツケースを整理したりして。

エミリオ： 私は疲れていない、貴方がよければ今でも行きますよ。

ミゲル： それは、素晴らしい、早速老人ホームのツアーを始めましょう。

ああ、忘れていました、君は管理手数料か何か10ユーロを払わなくてはなりません。いいですか、もし今、それを私に渡してくれたら事務の女の子に、私から渡しておきます。

エミリオ： 管理手数料の支払い？ どんな種類のものだろう？

ミゲル： つまり手続きの費用、私もわかりません、支払った方がよいですよ。忘れないうちに。

エミリオ： 貴方、私は銀行の支店長でした。このようなことは分かります。

ミゲル： ええっ、銀行の支店長、すごいなあ、君が？もう一人のロックフェレだ！

エミリオ： ええ、ただの地方の支店長ですよ。たいしたことではありません。

ミゲル： いやいや、支店長は支店長です。ねえ、いつか、お金についての色々なこと、株式などを教えてください。私は何も知らないのです。私の頭は硬いから。ところで、ええ、いずれにしても10ユーロは今支払った方がよいでしょう。

エミリオ： そうですね、分かりました、今支払います。いずれ聞いてみよう。どうぞ取ってください。

ミゲル： はい、良いですね。さあ行きましよう、ここからロックフェレ、ツアーを始めましよう。

エミリオ： 私の名前はエミリオだ、エミリオ...

ミゲル： 貴方がいるここ、メインのサロンです。この老人ホームの紛れもない心臓部です。

公式には” パノラマ室”と呼んでます。しかし、皆は金魚鉢と呼んでいます。

エミリオ： ” 待合の間” と思いますね。

ラモン： 金魚鉢、金魚鉢の待合室、金魚鉢の待合室、金魚鉢の待合室。

ミゲル： ねえ、ラモン、今日は詩人だね。

ラモン： 今日は詩人だね、待合の金魚鉢の待合室。

ミゲル： こちらはラモン、アナウンサー、聞いたことを繰り返している。

エミリオ： ええ、ええ、彼を知っている、もう私達は挨拶を交わしました。

ミゲル： ラモンはラジオのアナウンサーだった、しかし今は自分の言葉は話さない、聞いたことを繰り返すだけだ。思うに、話しすぎて言葉を使い過ぎたのでしょう。

ラモン： 言葉を使いすぎた、言葉を使いすぎた...

ミゲル： もちろんそうだよ、ラモン、もちろんそうだ...

さて、続いて行こう、残っているところを皆見てまわりましょう。

ラモン： 残っているところを皆見てまわりましょう、残っているところを皆見てまわりましょう...